

プロスケーター 村主章枝さん「スケートから広がる世界」

11月にダラスで開催された六者交流会にてご講演頂いた、トッププロスケーターで映画監督もなさっている村主章枝さんに、ご講演の内容についてご寄稿頂けることになりました。スケートとのかかわり、選手時代、指導者としての経緯から映画制作への展開など、素敵なエピソードになっています。1ページでは収まらないため、2号に分けて掲載いたします。今月号では、これまでのスケート人生についてのパートを、次号では映画監督のパートを掲載しますので、ご期待ください！

スポーツにおける環境の重要性

2020年、パンデミックの最中にテキサス在住の生徒の御両親が、私をオンラインレッスンプラスで見つけ、そこからズームを使ったレッスンをしました。それがきっかけとなり、パンデミックが終わり行き来ができるようになってからは、オースティンに定期的に行くようになりました。そこから口コミで生徒が増えていき、現在は、ダラスとオースティンに毎月来て、指導を行っています。生徒の年齢層は幅広く、下は4歳から上は60歳の方までいます。オリンピックを目指す子もいれば、ADHDや自閉症など発達障害がある生徒もおり、一人ひとりの可能性を引き出せるような指導を心がけています。

私は、現在、ラスベガスに在住しております。ラスベガスはエンターテイメントの街として有名で、ショーやイベントに町全体が力を入れている印象がありますが、一方、ダラスはスポーツが非常に盛んな都市です。ダラスでは、エンターテイメントとして、スポーツが成り立っているだけでなく、教育の一環としても力を入れており、環境も非常に整っていると感じます。

例えば、ダラスではホッケーチーム「ダラス・スターズ」が所有するリンクが8か所あり、その他にもダラス・スターズ以外が運営しているリンクが3か所あります。これに比べて、日本では選手たちが練習場所を確保するのに苦労しているのが現状です。また、Friscoエリアにはサッカーやアメリカンフットボールのフィールドが数えきれないほど存在します。

選手を指導する上で、彼らのための適切な環境を整えることは、重要な課題の一つです。これはビジネスにも同じことが言えると思います。人は、自ら変わろうと強く望まない限り、なかなか変化しにくいものですが、環境が変わることで劇的に改善されることがあります。

私は、父の仕事の関係で、3歳から6歳までアメリカ・アラスカ州におりました。ご存知のとおり、アラスカは1年のほとんどが寒く、真冬もマイナス30度になります。そんな中、私は外の凍った池や沼でスケートを始めました。アラスカでの生活ですが、言語の問題や生活面でも、幼い私と妹を預けたり頼る人もなかなかいなかったり、道路が凍って車が使えなくなったり、苦労も多かったと両親は話していましたが、たくさんの良い体験、経験もさせてもらいました。犬ぞりレースを見に行ったり、くじら、流水を見に行ったり、オーロラを見に行ったり...。そして、スケートにも出会うことができました。両親が、アラスカでの体験は簡単には得られるものではないと思ひ、苦労を覚悟の上、選択してくれたことで、私の人生は大きく変わったと思ひ感謝しています。また、指導者になり、勉強して学んだことは感受性を豊かにするためには、幼少期にさまざまな経験が必要だということです。

それは、

1. 自然との触れ合い
2. 芸術や文化との接触
3. 多様な人との関わり
4. 読書や物語の体験
5. 自由な遊び
6. 失敗や挑戦の経験

です。

これらの経験を通じて、子どもが喜びや驚き、共感、感動といった感情を持つことで、豊かな感受性が育まれるとされています。



▲写真:アンカレッジ時代(左が村主さん)

私とスケート

日本に戻って6歳からスケート教室には入りましたが、競技者として本格的に練習を始めたのは15歳くらいからです。選手を目指していくには、スケートの場合は、8~9歳くらいから目指した方が良いでしょう。身体の骨格などが出来上がっていくのが、大体10歳くらいまでなので、その年齢までに、競技者としての練習を始めた方が良いでしょうということです。

私が始めた頃は、フィギュアスケートが盛んではなく、両親は、まさか私がプロスケーターとして活動していけるとは思っていなかったもので、勉強に力を入れていました。しかし、中学二年生のときに出場した大会でミスを連発し、生まれてはじめて大会で悔しいではなく、恥ずかしいという感情を抱きました。そこから、「こんな思いは二度とたくない。自分の練習の仕方を変えなければ」と、一日1時間しか滑っていなかった生活から、両親に送り迎えなどを頼み、練習を一日3時間以上に増やしていききました。

その後成績は伸び、世界選手権ジュニアで入賞するレベルまで、上げることができました。

私が海外の試合に出場するようになった頃、トップクラスの大会にアメリカからミッシェル・クワンという選手が出場していました。私と同じ年なのですが、ある年の世界選手権に、彼女は大変身をして出場してきました。それまでは幼い少女のような子だったのに、突然、成熟した大人のような作品を演じたので、私は「何があったのだろう」と興味を持ちました。調べると、「振付師」という専門の人がついて、プログラムを作ったことがわかりました。私は、この人にどうしても習ってみたいと思ひ、何とか連絡先を手に入れた、国際電話をかけてお願いしました。その振付師、ローリー・ニコル先生が私のスケート人生を大きく変えました。

ちなみにフィギュアスケートのコーチと振付師の違いですが、フィギュアスケートは、決められた分数の中で、曲に合わせて、要素(ジャンプやスピン、ステップ)をこなしていきます。要素の難易度が高いものをやったり、その要素が正確で美しかったりすると高得点をもらえます。しかし、点数の構成は、要素とは別に、要素と要素のつながりが音にあっていたか、音楽の解釈は良かったかなど、いわゆる芸術性を競う得点もあります。コーチは、個々の要素の技術を指導したり、全体を見る監督のような役割です。振付師は、音楽を選んだり、要素の構成を考えたり、技と技のつながりを考えるのが仕事です。

私の師匠である、ローリー・ニコル先生は、作品のテーマの選び方、音楽の選び方、技術の繊細さなどに長けていた方でした。そんな先生に、どんなに努力をしても追いつけず、ひたすら、先生のようにになりたいという想いでした。

私のモチベーションは、「良い作品を滑りたい」というところにありましたが、成績が良いときも悪いときもありましたが、28年間、33歳まで、スケートを続けてこれたのかなと思います。物づくりが得意な日本人ですが、日本人らしい職人気質があったからなのではないでしょうか。



村主章枝さん「スケートから広がる世界」は、次号「スケートから学んだ経営術」に続きます。